

## アーティストブックとバンド・デシネのあいだ： フランス語圏オルタナティブ・グラフィックの世界(1990-2024)

1990年代以降、団体として活動する出版社や独立系出版社といった、新しい出版社(ラソシアシオン社、コルネリウス社、ル・デルニエ・クリ社、フレオン社、アモック社、アトラビル社...)が、バンド・デシネの形式が持つ可能性についての芸術的探求をはじめた。それは社会的にはマージナルなものでありはしたが、しかし大いに意義のあるものであった。バンド・デシネのアルバムが縛られていた文化産業による要請(判型や読みやすさ)から自由になろうとしているこれらフランス語圏オルタナティブ・グラフィックの世界は、造形的な表現方法を多彩なものにしようと試みている。それはたとえば絵画であったり、版画、コンピュータグラフィックスによるモンタージュ、転用などといった表現方法である。彼らの作る本は、複写法やシルクスクリーンといった技術を活用しD.I.Y精神に基づいてファン雑誌を生み出したパンク・カルチャーを手本としており、語りとそしてシークエンスに組み立てられたグラフィックの創作との間で揺れている。こうした本たちは、アーティストブックの流動的なカテゴリーについてや、それらの作品が社会における流通の中でどのように正当化されるのか、ということについて問いを投げかけたい思いにさせる。こうした創作方法は今日、フレモク社、ラ・サンキエーム・クーシュ社(ベルギー)、アドヴェルス社、イオン社、アルビトルール社、ザ・フーチー・クーチャー社(フランス)、エカトンプ社(スイス)ら出版社の探求によってさらに先に進められているが、彼らの最新作についてはこれから一緒に見てゆくことにしよう。

### グラディス・ル・キュフ

ルネッサンス期のイタリアを専門とする美術史の研究者(パリ社会科学高等研究院、美術・言語研究センター－美術史・美術理論センター所属)であり、リール大学で教えている研究を進め、2014年からはオルタナティブ・グラフィックの世界と実験的バンド・デシネの作品に関する執筆を行っています。私は、アーティストの創作過程の中でイメージが結びついてゆく論理や、バンド・デシネ作家が「巨匠たち」とどのように関わり、アンダーグラウンド・アートの歴史の道を切り開いてゆくにまで至るのか、ということについて関心を抱いています。これらの研究は、まずプレ・カレの批評・理論雑誌(2013-2021)において出版され、L.L.ド・マルス(『頭蓋から』ラ・サンキエーム・クーシュ社、2022)、フレデリック・コシエ(『ブリュンヒルデ』、フレモク社、2021)、J.M.ベルトヤス(『ゆるい物語のアンソロジー』第5巻、アドヴェルス社、2023)といったアーティストたちと共に仕事をする中でさらに進展してゆきました。